
ももたろう

青空女兄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ももたろう

【ZPDF】

Z6795D

【作者名】

青空文兄

【あらすじ】

じーさんばーさんに拾われたかわいらしい男の子は3匹のお供をひきつれて、みなを困らせているオーネもとへと向かいました。

(前書き)

すべてがホモと云つて過言ではない。

むかしむかし、
あるところに、

男と男が住んでいました。

「じゃつ、おれ行つてくるわ」

「はへへ、お勤め、おめでたせ。ちゅう」

旦那を送り出した主夫は、
買い物に行きました。

川のほとりを歩いていると、

「アラ、こんなところになんてステキで立派なマツタケ！ 持つて
帰つて、ダンナをまと一緒に食べましょつ」

主夫はマツタケを背負い、一人の愛の巣へと帰りました。

「ただいまあ」

「あなたへ、今日川でこんな素敵なマツタケみつけたのよお～～」

「おおこりやすんばらし」「マツタケだ！ 色といい、形といい、大きさとも匂いもサイ」「ーだ！」

旦那はそれしか口に入らないという様子で顔を近づけていきます。

主夫も一緒にになって顔を近づけてこきます。

「ねええ、セーノと一緒にかぶりつきましょー」

「おおそりやいに考へだ。愛してるよ。チコッ」

「やだあん、アタシじょないわよ、マツタケをタベルのつ

「わかつてるよ、キミが田の前にいたらガマンできなくつて」

「あらあら、そなに田ダレたらしあつてえん。マツタケだいす
きだものねえ」

「じゃあ一緒にね、一緒に食べようね、セーノ!」

二人はパクッと両側からマツタケの柄をくわえました。

「うわわわわわわあああ

「アラッ、マツタケが悲鳴を上げたわよ?」

「ホントだ。ナニかな?」

「『ナニかな?』つじやつねーよつ、アホンダラフーー おめーら
ソレしか田に入つてねーのかよつー!?」

男一人はびっくり仰天しました。

そこに現れたのは生まれたままの姿のかわいらしい男の子だった
です。

「おやまあ！ あなた、あいつのことは子供を授からないアタシたちへの神様からの贈り物よ。」

「そうだねえ、うん！ あいつとあいつだー、マツタケから生まれたから『マツタケたる・・・』

「シャツラーニッシュプー！」

オレは初めっから、いーるー、おまえらが勝手にマツタケと思つて連れてきたんだろーがつ！

それにオレには『ももたろう』という立派な名前があるー。」

舌打ちが鳴った。

「じゃあこいよ。ももたろうで」

「チツッて言つた？ 今『チツ』って言つた、じじい？」

「だれがじじいじゃー、ちやんと『パパ』と言わんべあつ」

「そしてアタシは『ママ』」

「そんなゴツー『ママ』がいるかーつー、ばばあで充分だばばあで

「まああつー、そんなことを言つなんて・・・アタシたちの育て方がわるかつたのカシラ・・・」

「育てるもなにも、初対面だらうがつ・・・ああ・・・怒鳴ついたらめまいが」

ももたろうはへなへなと倒れてしまいました。

それからじしまらべの間ももたらつは旦を覚ましませんでした。

男一人は一生懸命ももたろうを介抱しました。

旦那は毎日、眠るももたろうの手を握つてあげました。主夫は毎日、眠るももたろうの色も形も大きさも匂いもサイバーのモノを握つてあげました。

「あなた～～～！ ももたろうが目を覚ましたわよッ～！」

「おおつ。えがつたえがつた」

「・・・・ありがとうな。あんたらには世話になつた

「ああ・・・あなた・・・、ももたろうがアタシたちに『ありがとう』って

「つむうむ、苦労して育てた甲斐があつたの

ももたろうはあえて突つ込みませんでした。

「じじい。ばばあ。オレは行かなきゃいけない。おにいのシマく

「なんとー・・・わかった。かわいい子には旅をさせると喜びつこの。それではこれを着ていきなさい」

旦那は押し入れの奥から一つの衣装ケースを取りだしてきました。

「へ～え、なかなかいいじゃん。かつこいいぜ」

裸だつたももたわうは
その全身くまなくトゲの付いている革のパンツ、革のジャンパー、
等々に身を包みました。

「これはな、

おれがいつかおれ好みのかわいい男の子が現れたときに
密かに着せようと特別な生地で作つておいた服で・・・」

「サンキュー、じじい、じゃつ、こつてくるぜー。」

ももたわうはみなまで聞かず男たちの愛の巣を飛び出してしまつた。

ももたわうは道をずんずんと歩いていきます。

街の中を行き交う人々はすれ違う他人など田もくれません。
空には鳥らしき影のみ。どこまでも高く広がっていました。

雑踏の中の孤独に浸りながらももたわうが歩いていると
突然一人の少年が声を掛けてきました。

「ももたわうさん、ももたわうさん」

「なんだおまえ？ なんでオレの名を知つている？」

「細かいこと気にしないで。僕、あやしい者じゃないよ」

犬顔の小柄な少年は、黒目がちな目をクリッともせふつくりした頬

を一ヶ「つと上げました。

そして瞳の奥には妖しい輝き。

「胡散臭くてたまらないが。オレになんか用か？」

「あなたのその、お腰に提げた」立派なきびだんご、一つ僕にくださいな」

「オレのズ」にそんなものが付いている?」

「あなたの着ているのは幻の、ホモには見えないという服。そう、いわば、今のあなたは裸のももたろうさまで・・・」

「あんの、じつじつ——つ——！ こんなつでもねえもん、着せやが
つてつー！」

ももたろうは怒りに身をだぎらせました。

ほらいたのを思い出します。

「だいじょうぶ。だれも訴えたりしないよ。よくできてるよね」

「そりやそりだらなつー。」

ももたろうは今少年の皿に映つてこの歎につれてゐるゝこと
しました。

「とにかく、おばあさんが一生懸命握っていたきびだん」、と
一つでもおこしゃう！早く、早く食べたいっ！」

「あのな、」これは一つあるからってそういうおこしゃれと一つだらうがあ
げるわけにはいかねえんだ

「うー、口とした口の端から涎を垂らしてなつてこる少年をもも
たわうは説得します。

「それじゃ僕、あなたがその気になるまでどいまでもお供するわー。
イヌと呼んで！ 好きにしてー！」

そうしてもまたわうはイヌをお供にまたずんずんと歩いていきました。

並木道を進んでゆくと一本の木の陰からももたわうを見つめる田が
見えます。

「おー、やーのでかーの。オレになんか用か？」

「キヤツー、バレちゃつたー、はずかしこー！」

幹よりも数倍太い体が木の陰に隠れようじます。

「いや、無理があるから。尻隠れてないから」

「・・・ももたわうさん、ももたわうさん。あのー、そのー、お腰
に提げたきびだん」、「オイラにこません？」

「おまえもかー！」

ももたろうは大男の目に映つていて、自分の姿と男の正体がすぐにわかりました。

「だつて、だつてソレ、とっても素敵！　ああ、おねがい、欲しい
つつ！」

「あのな、これは一つあるとは『え』一つは予約済みでも『一つしか
残つてねえんだ』

大男は木の陰からモジモジした声で言いました。

「わかりました。オイラももたろうさんのためならなんだつてする
よ・・・・キヤッ言つちゃつたつ！」

大男は思わず木にしがみつきます。木はバキバキと大きな音を立て
て折れ曲がりました。

猿顔の巨体が露わになります。

「ももたろうさん、あんなサルなんてダメだよつー。僕だけじゃ
マンゾクできないのつー！」

イヌがふつくらした顔を歪ませて叫びます。

「アレはむしる『コラ』だ」

ももたろうはイヌに次いでサルをお供にずんずんと歩いていきます。

「 もう少しでおひこ のシマだぜ」

ももたろうが連れの一人に声を掛けたときこきなり頭上が暗くなりました。
と思えばすぐに明るくなり、田の前には背の高い男が背を向けて立つていました。

「 ・・・ おめえ、ずっとおしたちを見下ろしていたヤツだな? 」

「 わすがですね、気付いてこりつしゃぬとは」

男が振り向きます。足下までの長いバーから爬虫類顔だけを出しています。

「 オレが旅立つたときからずっとシケていたな? なにが田的だつ」

「 ももたろうさんももたろうさん、私もそちらの方々と同じなのですよ」

「 ホモつてことか」

「 それも否定はしませんが。私も欲しいのですよ。貴方のお腰のきびだん」をお一つ

「 あんな、残念ながらもひ、空きは一つも残つちゃいねえんだ」

「 そつ、そそそれではつ! あ、貴方のその、お、お腰に提げた『
きりたんぽ』おつ! 」

「 せつ、是非ともお一つ、トれここいこーー! 」

岡山名産ではなく秋田名産を男はせがんであります。

「 イレ、コイツ、僕らで予約が埋まるのを待っていたなあつ
つ！」

「 キイイーっ！ サルもおだてりや木に登る パーンチツつ！
！」

サルの太い腕が長身男の顎を捉えます。男は空高く小さな点となりました。

しかしその姿はふたたび大きくなつてきます。

四角い影となりももたろうたちのもとへ降りてきます。

「 ももたろうわんわん、コイツ、コイツ変態だよ！」

「 キヤアアツ！ イのヒト、なんでナンモ着てないのわ？！」

手足の指で「一」を開け広げていた男はふんわりと着地しました。

「 これはですね、トリのように自由に飛びには余計な物を身に着けていてはですね・・・」

むしろモモンガのように飛んでいた男を新たに連れ、ももたろうたちわざんずんと進んでゆきました。

ももたろうを先頭に

小柄なイヌ、じつついサル、長身のトリが続いてゆきました。

辺りには男同士寄り添う者、一人携帯片手にポツンと人待ち顔の者、甲高い声で騒ぐ者たちなど様々なイキモノが見られました。そしてその誰もが一行を見つめっていました。主に先頭のももたろうを。

豪邸の大きな扉の前に着きます。

レーザー光線が飛び交い、きらびやかなネオン看板で埋め尽くされています。

その一つには、『〇九！兄イイイイイツツ！……』と書かれています。

『ガガガガガガ』と扉が開いてゆきました。

「おおっ、ももたろうー、よくぞ来たツツ！」

そこにはマツチヨな男がいました。

赤褐色の素肌に虎縞のとても小さなビキニだけを穿いています。

「ももたろうさん、アレがおにいなの？ とってもさわやかな男性に見えるよ？」

「ナニを言つ。アレは危険極まりない男だ。そう、オニの化身と言つてもいい」

「やうお？ オイラけつこう好みかもー」

「冗談は首の太さだけにしや。よく見ろ。アノまがまがしいツノを！」

「ツノ、ですか？」

お供の三人は男を凝視します。

その田は自然と山一ぐと溝がれていきました。

「あっ、アレッ！？」アレはあああああっ！！！…」

「キ———ツツ、キケン——！　キケンキケンキケン、キケンツツ——！」

「ま、まさにっつー、まさにアレはホーのシノオオオツ、ノオツツ、ノオオオーーー オツツツーー！」

ドキードキの上位機、たるりとハリ出たモノが見えてます。

「おーいッ！ もう、シマの外へ出るだなんてハタ迷惑なことほざめろっ！」

「なにを相変わらずカワイイ」と言つてゐるのだ、我が弟よ」

「弟！？」

驚く二人を昨日にオーナーはももたろうに近づいてゆきました。
そして愛おしそうに見つめてから、しつかりと強く抱きしめました。

「いつ！？ 痛でででででえええあああおいつつーーー！」

「バカかおまえは。こんなトゲだらけの服に思いつ切りしがみつきやがって」

必要以上に鋭利な光を放つ銀色の装飾がももたろうの体を覆つてい

ます。

「や、そんなん見えてるヤツがここにいると思つかつ、アホ……」

オニはちくちく痛む腕を振り回しながら邸宅の中へと入つていきました。

その場に残されたももたろつを、お供の三人と野次馬の男達はまじまじと見つめています。

オニが手に何かを持つて戻つてきました。

「弟よ、オニに金棒だ」

「いやムチじやん？ ソレ

そもそもたろつが言つが早いかオニはとげとげの付いたムチをももたろつに吊きつけました。

「田には田を… トゲにはトゲを… これぞアーヴの愛のムチと知れいっつ…」

ももたろつの衣装がビリビリと破れ引き裂かれていきます。

「ああ、もつつー。僕つ、今ほどホモの我が身を悔しいと思つたことはなによ」

「キイイツ！ ももたろつをああんつ…」

「せつかくー セつかくの痴態だつてのこつ、ちこつとも見える…」

周りからは瞬り泣く声までもが聞こえます。

その場にいる男のだれも、ももたろうの姿の変化を見るのはできませんでした。

「フフ。これでもう、我々を阻むモノは無くなつたか？」

疑問形でオニーがももたろうに話しかけます。

ももたろうはかすかに残る布きれだけをまとこ、キッとオニーを睨み付けています。

オニーはゆっくり、ももたろうと近づいてゆきました。

「今だ！」

「そうね！ 今しかない！」

「約束の時は、今！」

イヌ、サル、トリが動きました。

右に掲げられた雄々しい丸みをイヌが小さなお口に含んで転がします。

左に掲げられた雄臭漂う丸みをサルが肺活量に任せ吸い込みます。中央に掲げられた色素濃い笠のぐびれをトリがキツツキのよつに搾ります。

唐突な刺激にももたろうの中から勢いよくシャワーが噴き出しました。

「もぐあつ、わ、わた……！」

「キキイイイイツツー！　『サルものは追わず』プロオオオオ——ツツ——！」

独り占めするトツを、嫉妬に駆られたサルが全力を込めて殴りました。

コートをはだけながら、トリはオーの顔へと飛んでいました。

「！」の際アニでも可——。」

イヌは素早く駆け寄り、田の出のようビキニの上から押めるモノをくわえました。

オーはあつという間に腰碎けになり膝を震わせながら崩れ落ちました。

オーはももたろづへ虎縞のビキニを差しだしました。

これでもオーは外を歩くことができなくなりました。

ももたろづは戦利品を身に着け意気揚々と

旦那と主夫のいる愛の巣へと帰ります。

道中何度も呼び止められましたがお供たちの必死の説明により事なきを得ました。

「じじい！　ばばあ！　戻つたぜー！」

そのとき旦那と主夫が田にしたのは、

戦利品に收まりきれないほど立派なおタカラ。

それからとこつもの、

みんなはおタカラを囲んで大いに盛り上がりましたじゃ。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6795d/>

ももたろう

2010年12月15日14時36分発行